美と醜

ヤクシニーの底辺

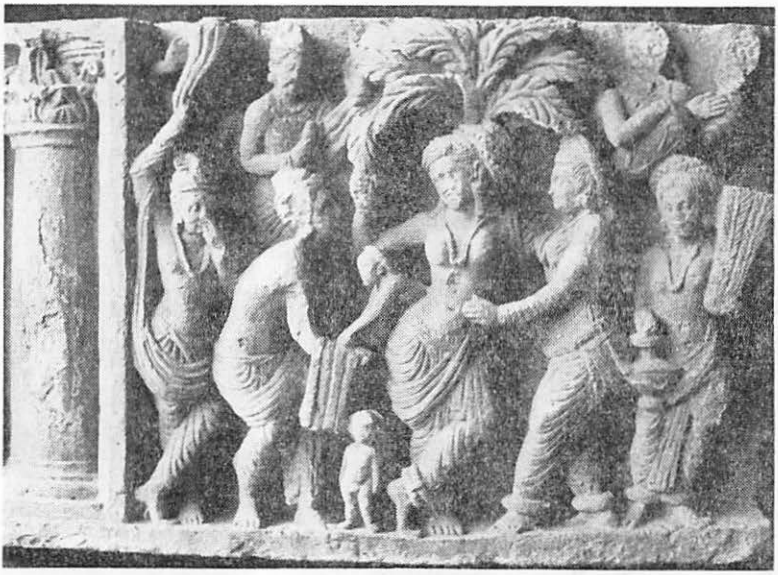
高橋堯昭

1

ガンダーラ彫刻に、写真1の如く仏母マハーマーヤが木の枝をにぎって釈尊を産まれる構図が沢山ある。この枝をにぎっている姿は、恰もバールフット・サンチー・マトウーラのヤクシー像（写真2参照）を思わせる。それもその筈、インド原住民からのヤクシー信仰・習慣の上に立って、これらの物語は作られたものと思われるからである。

即ちヤクシャ・ヤクシーはインド最古の古典リグベーダ以来[1]、各書に出、特に叙事詩マハバーラタには非常に多く登場している。又数多き彫刻も彫られているから[2]、如何に多くこの神への信仰があったかが想像されよう。例えば「釈迦族の人々は子供が産れると、Yakṣa Sātyavardhana にお参りに行く習慣があった。従って釈尊をつれて行くと、逆にヤクシャは子供の前にひれ伏し、彼こそ『神の中の神』であると声高に言った。以来彼は『Devati Deva』と呼ばれた[3]。」と。

木の下に立つマハマーヤが木の枝をもつ事例の外に、逆にガヤやバールフットの彫刻には[4]「木から手が出たり」又「木から水の壺をもった手」が出ているのがある（写真3参照）これらは Lalita Vistra (XVIII) にあるように



1、誕生図（筆者蔵）

「釈尊が、Pānihata の水から出る時」、或は「Nairañjanā 川を渡った時、木から手がさしのべられて、釈尊が水から上るのを助けた」[5]という伝説の表現である。かく古代よりの聖樹信仰が仏教の中にとり入れられて行ったことがわかろう。

2

そもそもヤクシヤ・ヤクシーとは一体どんなものであろうか。この神の性格を示す、ユニークな話がある。即ち「Vaisali の門衛が死ぬ時、願をかけた。未来世には Demon に生れ変り、人々を守りたいと。そして人々に言った。『私がヤクシヤになった時、その首に鈴をつけよ、もし町を襲うものがあれば、その鈴は彼等が逮捕されるか、追い払われるまでなり止まないであろう』と。そこで町はずれの護衛の家に像を祀り、鈴を首にかけ、舞踊や音楽でこれを供養したという。この話を Shiefner はチベットの文献から引用している。[6]

2、樹下ヤクシニーバールフット出土　カルカッタ博

以上のことから、ヤクシヤ・ヤクシーは古代インドの守門神・守護神であったことがわかる。ヤクシヤ・ヤクシーは漢文では夜叉である。本来は「暗い、闇黒の世界の主であり、又恐しい力をもったもの」であった。古代人ならずとも、今テレビで見るような三原山の噴火の想像を絶する大地の力を感ずる。即ち全島民が脱出している如く大地の力が人間の運命を左右する。この巨大な大地の底の力の一面をヤクシ・ヤクシーといった。

然し大地の力にはもっとマイルドな面もある。即ちカリーダーサの詩にあるように、[7] モンスーンが雨雲をもって来る。動物も人間もいそいそとして雨をまつ。そして雨が降ると、木の芽が出、あとからあとから、にょきにょきと小動物がはい出して来る。このさまをみて、古代の人々は大地に不可思議な力、活力の源があると感じたのであろう。とりわけ大地から生れ来る樹や巨木には大地の生命が宿るという考えから、「木の中から手の出る」といった素朴で率直な表現で大地の力を示したに外ならない。

従って大地の生命力の表現としての木の下で釈尊が生れるのと、バールフット彫刻で女神が樹下に立っているのと

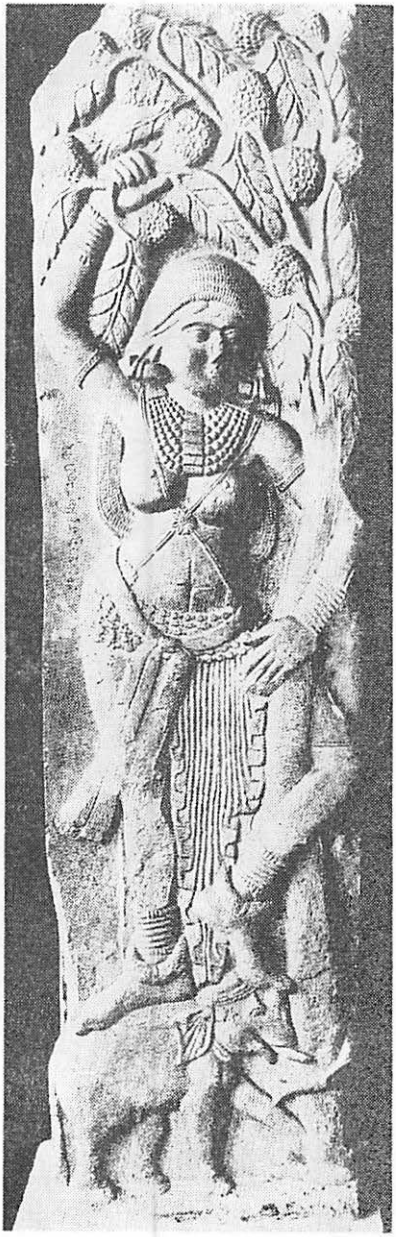
は同一の考え方であると考える。即ちバールフットのヤクシーに五つだけ銘文がついているのがある。

1. Chadā yakhi (Candā yakkhī, Candrā yaksi)
2. Yakhini Sudasanu (Yakhini Sudassanā, Yakṣiṇī, Sudarsanā
3. Chulakoka devata (Cullakotā devata, kṣudrakoka devatā
4. Mahākoka devato (Mahākokā devatā)
5. Sirimā devata (Sirimā devatā, srimā devata)[8]

の名前が判読出来る。共に樹との関連を示していて面白い。即ち1と3は上方の枝をにぎり、左手と左足を木の幹や根本にからませているポーズをとる。即ち1はナーガ樹、〃乗りもの〃はマカラの尾をもつ馬である。2はマカラの上に立つ樹ではなく後述の蓮の花の下に立っている。その名のスダルシャナという名は「ジャンブ樹」の名で人々に望みをかなえてくれるものだから樹と無縁ではない。

1と3とは右手で上方の枝をにぎり、左手と左足を木の幹と根本にからませている。（一体

3、複写　バールフット彫刻より



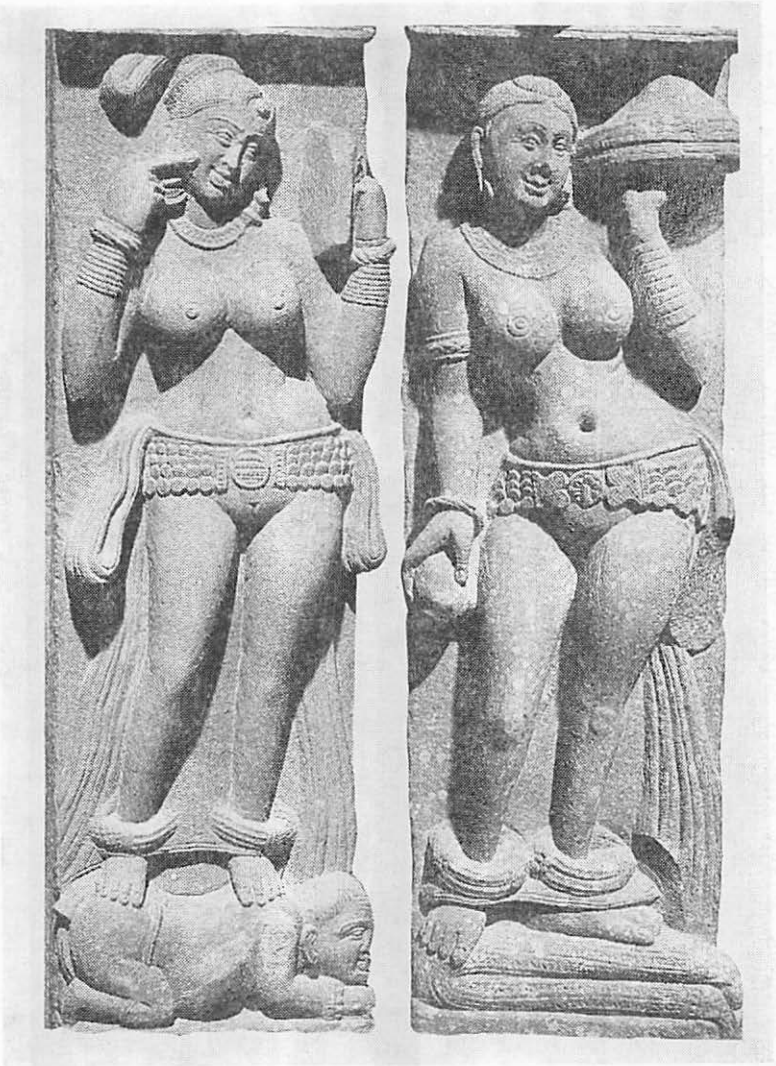
4、バールフット Chulakoka devato

となっている所が注目される）又3は花の咲くアショーカ樹の下で象にのっている。（写真4参照）そして4は乗りものはないが枝に手をかけている。然し5は乗りものにも乗っていないし木もない例外ともいえよう。然し図上に蓮華の半円が彫られているから、後述の如く、樹と同等の植物によって、広義にこれと関連づけられると私は思う。

かく考えて来るとヤクシヤ・ヤクシーとはそれがそこから生れ出ずる大地、そしてそこにひそむ生命力と無関係ではないことが分る。

3

バールフットの彫刻に Spavasu Yakho, Virudhako Yakho, Garigita Yakho, Sueiloma Yakho, Kupiro



5、マトゥーラ　豊満なヤクシー２体

Yakho (Kubera 毘沙門天), Ajakālako Yakho, Sudasana Yakhī, Cadā (Candā) Yakhī と多くの夜叉の名が彫られているから、当時はいろいろの夜叉が人々に信仰されていたことが分る。従って、特に豊満な肉体をもって豊穣をシンボライズしている（写真5）。当時の主な生業たる農業の多収穫と家畜の多産を示しているのである。

然しこれが仏塔のまわりの柵の柱に彫られている事実は別な意味を示しているように考えられる。従って現代人はあのコケティッシュな像を安置するなんて、特にあの姿態からは、仏塔にふさわしくないと思う人もあろうが、そこがインドのインド的な考え。このヤクシーこそ大地の底から湧き出ずる大地の底のファータリティ（豊穣性）、或はバイタリティー（その作用面は〝乗りもの〟の所で詳述）の表現なるが故に、すべての災いを除き去るという考え方で矛盾していなかった。（中には数は少ないが豊満な女性像ながら剣をにぎっているものもある程だから守門神としての面は十分もっていた。）

このような強力な力をもっているにも拘らず、夜叉は余り高い地位を与えられなかった。即ち、インド在来の神は[9]インドに侵入してインド文化の主流となったインドアーリャンの中にとり入れられるには、必ず低位の神として抱摂されるという例にならって、低い地位しか認められなかった。否、それが、かえって地位の低い庶民にとって親しみ易い存在となって信仰されて行った。

その低位を表現する〝美しいヤクシーの足下にうずくまる怪奇な醜悪な〝乗りもの〟をもってする。然しこれとても前述の如くインドアーリャンから二次的な神であるとされたものでもあろうが、別な面から、特に宗教心理的に考えられねばならない。

そもそもインドの考え方、例えばシバ神の如く破壊は破壊だけに止らず、破壊は必ず再生をともなう。これはゴン

ポ（チベットの大黒天）にも言える。あの恐ろしい形相は悪魔を打ち払うのみでなく、悪魔退散ということは必ず幸福を招来するという二面性をもっている。従ってヤクシーの〃のりもの〃は恐しく気持悪い生きものとして描かれているが、この恐しい乗りものによって悪魔退散から幸福が招来されるという二面性をもっているといえよう。

4

然してバールフット・サンチー、そしてマトゥーラから出土している豊満なヤクシー像はいろいろなものをふんまえている。私はこの“Vāhamam＝Vehicle”がヤクシーの本質を示しているものと考える。

勿も、この乗りものでも現在日本の諸寺にある四天王はどれも恐しい形相をした〃邪鬼〃をふんまえている。この邪鬼とヤクシーの Vāhanam とは性格的にかなりの、へだたりがある。これと混動すると本来のヤクシーの性格が分らなくなると私は考える。

現在の四天王の像は中央アジヤで西方の影響によって、イランの甲冑を帯び、長い槍や刀をもって、本来のヤクシーのもつ特徴の守門神的性格を強め、特に守護国家的な数々の経典の影響をうけて悪敵を退散せしめる像と化して行った。これは中央アジヤの沙漠やチベット高原の気候は寒暖の差が多く、常に生死の境にさらされていたり、或は小さなオワシス国家群が常に蒙古族等の外敵にさらされたり、はた又隊商の「曠野剣難所」を行く危険から、一層守護神的な性格が強くなったのは自然のことであろう。

然しインドの夜叉はこれよりもう一つの面が強調された。即ち大地の生命力から生れるヴァイタリティー、これが敵を退散せしめるとの信仰である。為に豊満な肉体を柵のまわりに彫った。これ又大地の生命力の表現だからである。

即ち、大地の生命は木に宿る。樹が聖なるものだから、自然に仏塔とかチャイティヤを樹で表わすような考え方になる。仏塔自身も宇宙の底に連らなる、生命の木のシンボルとしての考え方があったから、大地の精イコール聖樹、聖樹イコールヤクシーそして又それがイコール仏塔という構図が出来て来る。だから仏塔を守る柵に美しい彫刻をほるのは、この大地の生命力の表現として、当然魔除けの力をもつという考え方である。

5

然らば大地の生命力、これを一般に「地母神」という。この「地母神についてユニークな神話があり、いかに我々がこの大地との深いかかわりをもっているかが示されている。

即ち、インドの古典ラマヤーナに次のような話が書かれている。即ち太子の妃シーターはその名の如く「種まき穴から生れた子」として穴から生れたといわれている。即ち古代人は種まきの時、大地に穴をあけて、ここに種をまいた。種は発芽成長して収穫をもたらす。この穴から生れた子、シーターとはまさに大地の子、大地の精といういみをなす、これは古代の生産儀礼の所産として、当時の生産形態が農耕文化であったことから推量される。この穴から生れたシーターは、即ち大地の子であるシーターは、生長し、ラーマ王子と結ばれるが、セイロンの悪王に連れ去られる。これを猿の形をした神、ハマヌーンの力をかりて奪い返す、然し長年の幽閉から、その貞操を王子に疑れた彼女は、「もし貞節であれば、火の中でも焼けないであろう」と火中にとび込む。すると火の神アグニは彼女をだきかかえて出て来た。彼女は無傷であった為、喜んだ王子はインドに盛大な凱旋パレードをする。然し民衆の疑いは晴れない。遂にシーターは大地の割れ目に身を投げた。穴は自然に閉じて、大地から生れたものは、又大地に帰って行っ

たという長編詩である。大地から生れる聖なるものはこの大地の神、その表現の聖樹は共に「大地の生命力」の一表現と考えられる。従って釈尊の生れられた時の木は Nidānakatha には Sāl-tree, Aśokāvadā には Mango, Lalita vistra には Plaksa、そして Viyāvadāna では Aśoka-trea と、経典によって木の説類は違うが、大地から生ずる聖樹の信仰に外ならない。然も釈尊も前述の誕生の時も又悟りの時も涅槃の時も皆木と大ないなる関係をもっているといえよう。特に熱帯インドでは涼しい夜に人々は集る。従って聖なる行事、村の集会等、世俗併せてこの聖樹の下が中心であった。以来、これらの樹を神聖なものとして、その樹のまわりに Caitya や Stupa が建てられて来たのも、皆大地の生命力の表現として同じものとして考えられて来たからである。

6

然して、このような聖なるものは「大地の生命力」の一表現とし、古来東西の国で〃大地母神〃の信仰として歴史上興味がもたれて来た。

然らばこの大地母神で表現される〃生産力、生命力〃というものは一体何を予想しなければならないのだろうか。

インドの大地は実に不思議な性格をもっていると思う。乾くとコチンコチンに固ってしまい、アスファルトのように堅くなるが、一旦雨が降るとドロリととけて泥沼のように変ってしまう特徴がある。あの乾燥していた時には生命のカケラも感ぜられないのに、水があれば生々として来る。これをよく目撃して来た私だけではなく、古代の人々もこの大地の底に「水」があって、これが大地をして活力を発揮せしめる根本のものと考えたに違いない。

特にカラカラの大地に滴然とモンスーンがやって来ると、そこからは一勢に木や花の芽が萌え出すかと思うと、へ

ビやトカゲはいざしらず、名も知れぬ気持ち悪い小さな生きものがぬるぬると顔を出す、その不思議な気味悪い小動物の顔を見て来た私には、ヤクシー達の乗りものの、あの不格好な生きものはこんなものを象徴しているように思われてならない。

こう考えると大地を豊かな大地たらしめるその本源は「水」ということになる。物理的な水もさりながら、水を水たらしめるものバアルナ（Varuna）、水の本性、神的な水の活性とも言い得よう。

これを裏付けるものとして、バガバッタギーターでは「はじめに世界は水であった。私（神）は水の中の生命の本質で、あらゆる植物を育くむ」[11]と。リグベーダーやヤジルベーダーには「空に先立ち、地球に先立ち、神に先立ち、水が最初に保たれ、すべての杯芽がその中に存在する」[12]と、大地の底の「水」が根本になって来る。これらを要約するように「あらゆる存在の本質は大地であり、大地の本質は水である」[13]ということになる。

この水ありてこそ大地は生き生きとして稔り多きものとなる。従ってあの豊満な肉体は水の作用の結果を

6、バールフット　蓮華の模様

シンボライズしている。たしかに、シリヤのテラコッタの如く、原始時代の人々は乳や腰、そして生殖器を強調している。それはそれで〃豊かさ〃というものを表現しているであろう。然しヤクシーの像では、私は別のものと考えたい。即ちヤクシーの肉体以上に Vāhanam 乗りものが重要である。従って木と上にかかれた蓮華こそがその富穣の作用そのものを示しているのであって、像は即ちその結果である。ここが注意されねばならぬ。あの美しい像の底にある〃みにくい生きもの〃、これあればこそで、これなくてはあの美しい像はないのである。

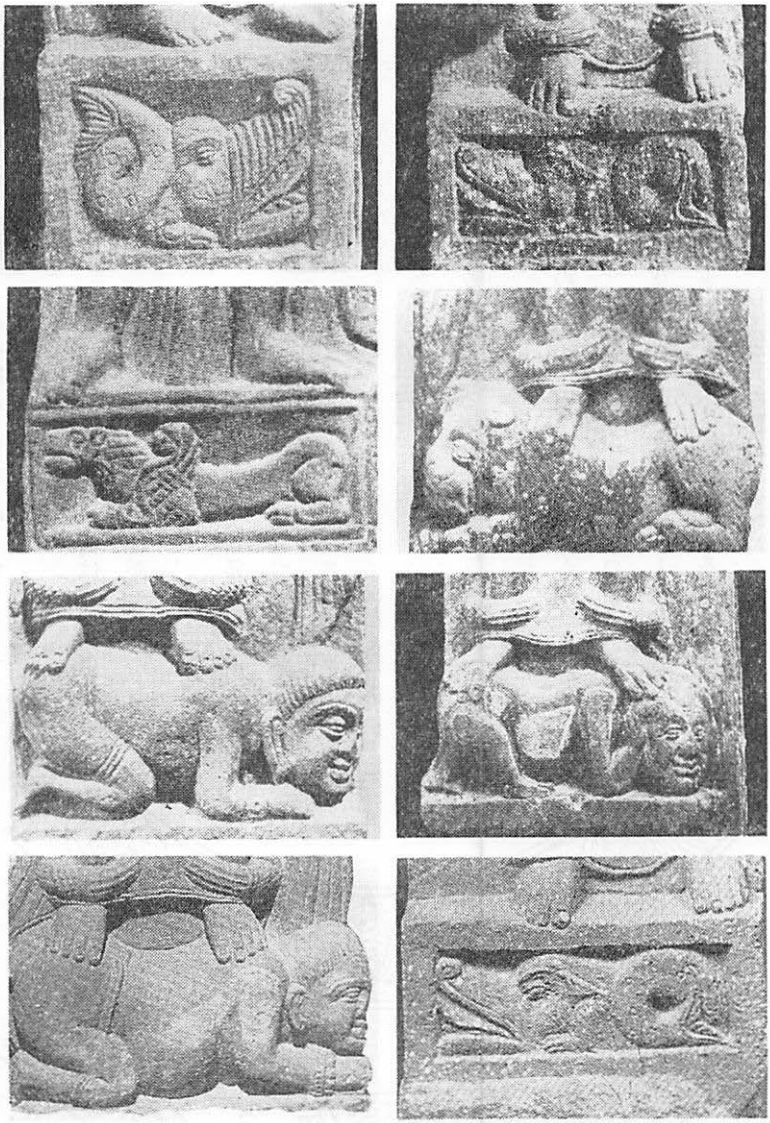
このように考えてくるとヤクシヤ・ヤクシーの「乗りもの」が最重要なもの。即ちこの大地の暗い然も力強い生命力を表現したものとして重要な意味をもって来る。

7

ヤクシヤ・ヤクシーの Vāhanam（乗りもの）

(イ) 侏儒

美しいヤクシーにふんまえられているコビト、然も奇怪な、一見薄気味悪い動物がうずくまっている。これは現代の四天王像でみられるように槍で苦しみ、刃の恐怖にさいなまれるような苦しみは微塵もない。否むしろ、ふんまえられていることを喜んでいるような姿もあり、或は喜々として神像を支えているようなものもある。然しこれら半人間は実にみにくい。これは一連の写真で理解されよう。前図6の如くバールフットの彫刻に怪奇な、実にみにくい容貌をした侏儒の口から蓮華の茎や花を出している像もあり、又臍からもこれを出しているのがある。これはサンチーやガヤからも出土している。これらはマハバーラタの「永遠な存在が宇宙の新たな創造に精神を集中すると、ロータ



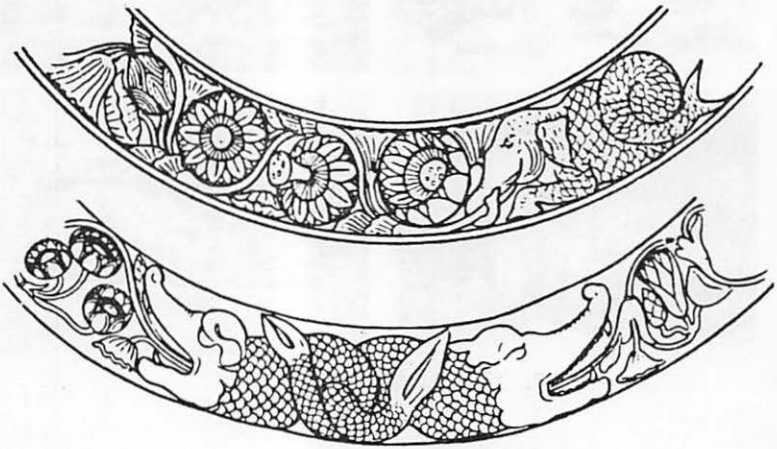
7、きみの悪い侏儒等ののりもの

スが臍から現れる」[14]ということである。

従ってこれらの侏儒は大地の生命のもと、すべての植物が、それから出る活力の作用として、あのみにくい像の働きを示している。恰もみにくい根から美しい花をつける茎が生えているように。従ってこのヤクシーの乗りものは大地の底の水、物質的な「水」だけではなく、水を水たらしめるエッセンス、これがブァルナである。これがすべての活力の源であることを示しているといえよう。

(ロ) ロータス

その侏儒や後述の動物の口からするすると蓮華茎がのびている図がある。（下図8、9）このようのロータスは水の生命力の作用面であり、いろいろの意味を含んでいる。いわば大地の精の表現であるといえよう。アグニプラーナに「ロータスは水を表わし、大地はその花である。ロータスの葉が水をおおうが如く、大

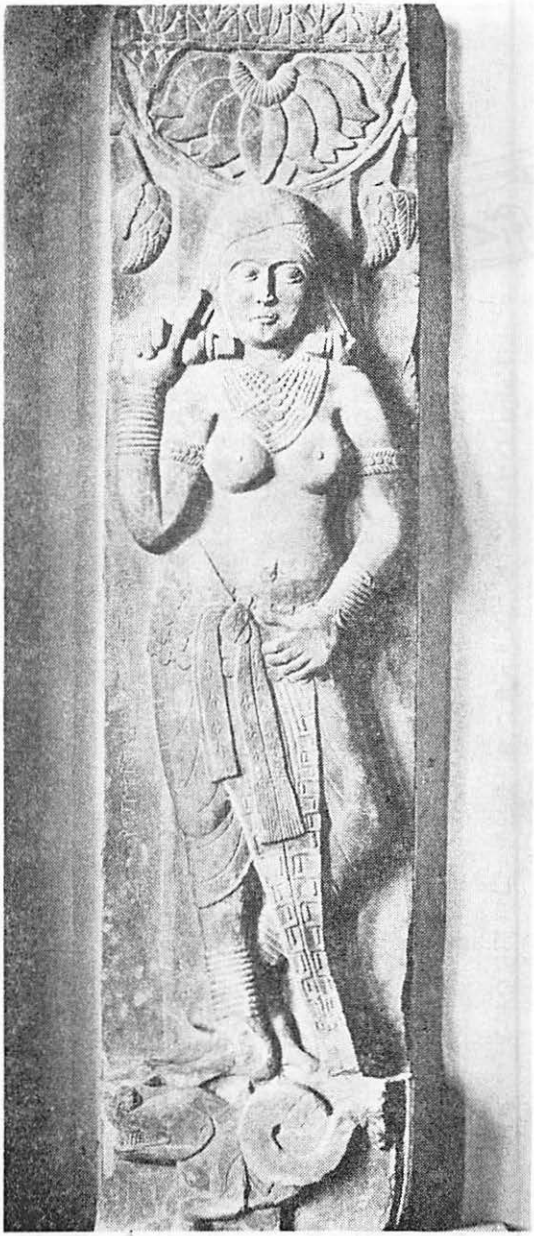


8、9、マカラの口から蓮華が　アマラバティ出土

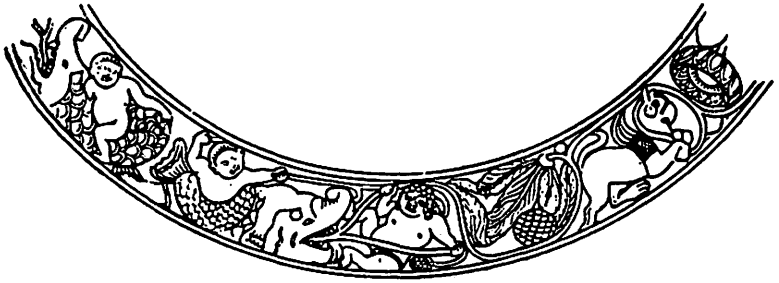
地は水の上をおおう」[15]とある如く、ロータスの葉は地球のシンボルであり、その花びらは、これらの「生命の連続的な発展創造を意味する」から共に生命の泉の「水」から生れ生育する。否植物だけではなく、万物の創造発展を意味する。それを素朴に表現したのが例のバールフットやアラバティ Amaravati の彫刻である。

(ハ) マカラ

この動物は空想上の動物であって、実に不思議な形をしている。即ち頭部はサメ・クロコダイルの水生動物だけで



10、ヤクシニー　マカラの乗りもの……バールフット



11、トラーナ……アマラバティー

なく、陸上動物である猪や象のような姿をしているが、尾部はきまって魚の尾の形をしている。このような乗りものの上にヤクシーは立っている（写真10）。図上には水から派生する蓮華の模様がある。

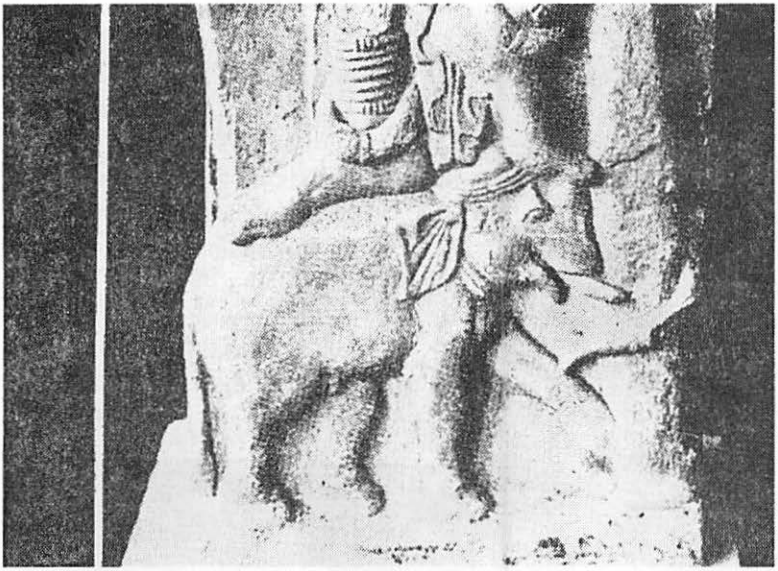
その外、各地の仏塔のまわりの欄楯の横木やトラーナの横木、そして入口のアーチの飾り梁等実に面白い絵がある。マカラの口からロータスが出たり、又人間や動物までも出ている。これも水による宇宙創造神話である。（上図11）

その外、サンドラグプタ王の珍しいコインに「マカラに乗った女神が、右手に長い柄のロータスの花をもっている」[16]彫刻があるが、これ又水の創造神話の表現と言えよう。

有名なヒンズー教の神話をまつまでもなく、前述の猪（勿論尾は魚）は Varāka Kalpa のはじめ、ヴィシュヌ神の第三の化身として宇宙の水を攪拌して、その中から地球を創り出す目的で現われるものとされている。従って水との関係が理解されよう。

(二) 象（ナガー）

ヤクシー像の下に象がうずくまっている。（写真12）インドでは象は雨雲を運ぶもの、否雨雲そのものと信ぜられている。即ち仏教の有名なジャータカで慈悲深い王子が旱魃に悩む隣国に、「雨を降らせる国宝である白象を貸し与えた為、都を追



12、乗ののりもの……バールフット

放されてメハサンダの山中に移り住んだという布施太子の話が語る如く、水と深い関係をもつ動物として考えられていた。

又同じ「ナーガ」と発言されるものにコブラがある。バールフット彫刻にあるアパララ竜王の物語の如く、ナガーは池や川の精として考えられていた。又ジャータカに「ナガー王は豊かな食糧と多量の収穫を意のままに産する貴重な宝石をもっている」[17]とあり、又叙事詩、マハバーラタには「クベラは（毘沙門天）は愛用の宝珠をもっている。それは死すべき人には不死を、盲者には目を、年よりには若さを、然して、その宝珠は難所にある洞窟の中にいる竜にガードされている〝壺〟の中に入れてある」[18]とある。こうしてみると竜も壺も皆水と関係が深いものばかりである。この壺の上にヤクシーが立っている。然もインド彫刻にえがかれた壺からは無数のロータスの花や葉が出ている。（写真13）

これ又「水」の生命力の表現に外ならない。然してリ

ーグベーターに「ヴァルナは水を守るもの、及び真理を守るもの、ヴァルナは生命のルール、創造の源」[19]、とあるように、万物はヴァルナ（水の本質）から現実の水→ヤクシーの乗りもの→樹木・蓮華と最後に完結したヤクシー像へと創造発展して行くのである。いわばこの世界はバルナ即ち水の本質の一大表現であるとも言えよう。

結

ガンダーラ美術で一番美しいシクリの仏塔正面のディーパンカーラ（燃灯仏）の物語も、（写真14）即ちこれまでの論を裏付けられると思われる。即ち釈尊の前身 Megha は野道で、村の娘 Bhada 或は Prakṛti から七茎の蓮の花を買い、これを仏に向って投げ上げると、その花は空中に止って落ちなかった。

又メーガは仏の通る道がぬかっていたのでゴザを敷いていたが、ゴザが足りなかったので、自分の髪の毛を敷いて

13、ツボから蓮華が……アマラバティー

14、燃燃仏とメーガ（ラホール博物館シクリ仏塔）

仏を通した。その功徳によって、次の世に釈尊として生れ変り、悟りに入ることが出来たという。

この物語で注意すべきは、仏の通る泥道も又少女から買って仏に供えた蓮華も水と無関係ではないということである。それに Bhada とか Prakṛti は「豊富」とか「自然」という意味であり、又 Megha は「雲」という意味で、少女が沼とか泉で見出されたという物語等々、水によって人生が「豊富」になるということとの関連を示している。

然も仏教で最主要なテーマーを含む燃灯仏の物語、即ち「仏の寿命の久遠長久」を示すこの物語は、仏教の最高の思想哲学を表現する。このことがこの「水」と関連する諸例で示されている所が興味をそそる。大地の底にある〝つきざる水〟の如く、仏の寿命は久遠長久である等実にユニークな説話である。且つ又そこへ登場する人物や人間ならざるものも水との関連上実に適役と思われる。私は古代インドでかくも素朴で、卒直な考え方が出

て来たことに大いなる驚きに打たれるものである。

かくて大地の生命力、「水」から発した種々な〃乗りもの〃、そしてそれから樹やロータスが出て来る。かくてそれら働きの結合によって出て来た美しいヤクシーは豊穣幸福の神として人々に信仰と夢を与えて来た。

このヤクシャ・ヤクシーの総大将が四天王である。このうちなぜか毘沙門天王のみ、長阿含世紀経四天王品[20]で三つの天王を統制する帝王となって行った。その王は、王たるべき九つの宝をもって人々に幸運を与えていた。その宝とは 1. Padma（ロータス） 2. Mahāpadma（ロータス） 3. Sariha（ほら貝） 4. Makra（海の怪獣） 7. Nanda（幸び幸福音楽） 8. Nila（インドいちじく） 9. Kharva（豊穣）で、これらからも「水との関連によって豊かになること」を示しているようにも思えるのだが Coomaraswamy 氏は "YAkSA" で持ちものはすべて水と関連があるとまでといっている。[21]

かく考えてくると、今まで大地こそ豊穣の源として考えられて来たが、この大地を大地たらしめるものが「水」に外ならず、この水によってこそ大地は豊穣の母体となることが出来ることが分った。

これをもう少し略述すると、大地の底にはプァルナとしての水がある。それの活力の作用面として "Vāhanam"（乗りもの）が成立、その働きで豊穣な木や蓮華がするするとのびる。そしてその間に立つ豊満な美しい女神像、これこそ水を中心とする大地の創造の成果である。即ち水の働きとその作用の結果に外ならない。

今までは豊満な肉感的な女神像なるが故に、その面だけが注目されすぎて来た。従ってこの女神像のかげに、このように暗らい恐しい形相をした〃乗りもの〃の存在が第二次視されて来たと私は考える。従って私はこの Vāhanam こそこれらの文化の底辺（基盤）を示す重要なものと考えているものである。

〔註〕

(1) R. V. 4,30, p3,5,10……

(2) 高田氏　仏教美術史論考　マウリヤ時代の神像彫刻及びインド女神像について参照
仏縁の起源　49頁

(3) Furgusson, Tree and Serpent Worship pls LXIX, XCI4

(4) Brgess, Buddhist Stupa (pl XXXⅡ—2) Burgess, Buddhist Stupa of Amaravati and Jaggayyapettia (pl XXXⅢ)

(5) Vogel, Indian Sepent Lore (pl, XⅡa)

(6) Schiefner, Tibetian Tales from the Kah-gur.

(7) 森秀雄訳　カリーダーサ　雲の使者より

(8) 杉本卓州氏インド仏塔の研究—仏塔と女神神信仰—四一九頁—二〇頁

(9) Yaksas というサンスクリットの原語及びその発表起源は非アーリャン又は前アーリャンのものである
(Ananda. K. Coomaraswamy pat 1—36—37 part 2— p 1)

(10) Furgusson Tree and Worship にはこのような聖樹がまずあって、やがてまわり柵をまわしたり、樹の下石の柱をたてる、これが後年 Ceitya とか Steepa になるといっている。

(11) ギーター (Ⅶ—8, XⅤ—13)

(12) R. V. (X—82—5) Y.V. (Ⅳ—6—2)

(13) Satapatha Brahmana Ⅶ—4—1—8

(14) マハバーラタ (Ⅲ272—44) (XⅡ 207—13)

(15) Agni Purana XLIX

(16) サンドラグプタロイン

(17) Manikantha Jataka (NO.253)

(18) Coomaraswamy YAKSAS 四〇頁

(19) R. V. 1—24—7

(20) 長阿含経巻二十巻　世紀経四天王品　大正2—一三〇下

(21) Coomaraswamy YAKSAS 四九頁 註